

師器は、壺B a・B b、高台壺A a・A c、B a、小型甕C 2がある。須恵器は、蓋、壺G、高台壺、仏器がある。

土師器（I類）壺類に注目して変遷を追ってみる。

7世紀後半－A 1 a・A 1 b・A 2 a・A 3 c・A 5 b
B 2 c・(B 5 b)

7世紀末～8世紀初頭－A 3 c・B 1 a・(B 7 b)

8世紀前葉－B 3 b

8世紀前半－A 2 b・B 6 a

8世紀中葉－A 4 b・B 1 b・B 4 b

D 川前2遺跡出土関東系土師器について

川前2遺跡で出土する土師器には、山形盆地の在地土器の他に、関東地方の特徴を持つ所謂関東系土師器が存在する。

S T18住居跡、S T186住居跡、S T615住居跡、S T583住居跡の4棟に、武藏型と想定される関東系土師器が存在することがわかった。7世紀後半から8世紀中葉頃にかけての非口クロ成形の土師器壺4点、甕3点計7点である（佐藤敏幸氏〔東松島市教育委員会〕、高橋誠明氏〔大崎市教育委員会〕、村田晃一氏〔東北歴史博物館〕3名にご教受いただいた）。

東北地方における関東系土師器とは、7世紀から8世紀中頃まで認められるもので、在地の「栗囲式土器」とは器形・製作技法が明らかに異なっている。食膳具の場合、在地土器のほとんどが内側をヘラミガキ後、黒色処理を行うのに対し、関東系土師器は、ナデのみの調整で、赤～黄褐色を呈している。甕においても、在地土器の外面調整はハケメが主体となるのに対し、関東系土師器は、縦方向のヘラケズリを主体とする特徴がある。

以上の事を踏まえて、当遺跡の土師器を観察すると、食膳具の壺は、I類B 3 bとB 4 bで、4点が該当する。B 3 bは双葉町遺跡でも類似する資料が存在する（S T1022）。県外においては、三貫地遺跡（福島県新地町）や、御駒堂遺跡（宮城県栗原市）、名生館官衙遺跡（宮城県大崎市）などで出土している。B 4 bに関しては、類似資料の存在が不明である。器形では、山の神1号墳（高畠町）出土資料と類似する。ただし、山の神1号墳資料は全て、内面黒色処理が施されている。B 2 cに関しては、器形、調整方法では類似するものの、関東系土師器とは断定できない。今後、関東地方と東北南部に同じよ

うな類例がないか、確認作業が必要である。

甕はI類B 1 a・B 2が該当する。どちらの甕も御駒堂遺跡で確認できる資料である。他にも器形と調整技法において定義的には合致する資料がいくつか存在すると考えられている。

当遺跡では、在地土器を主体に、関東系土師器と、在地土器、関東系土師器の範疇に属さない土器群の三者が存在している。これらの土器群は、関東地方からの移民が移り住み、彼らが製作する土師器様相が在地土器に吸収される過程のものと考えられる。

E 山形盆地内出土関東系土師器について

山形盆地内で、当遺跡以外で関東系土師器が確認された遺跡は、上敷免遺跡、山形城三の丸跡、北向遺跡、双葉町遺跡と資料はごく僅かである。

上敷免遺跡出土資料で台付甕（S T3）がある。台から体部下端にかけての資料で「武藏型」とされている。県内では唯一の資料である。山形城三の丸跡出土資料は関東系土師器の可能性がある壺が2点（S P1061、S D7032）ある。北向遺跡出土資料では、関東系土師器と明記されていないが、壺が1点ある（S T90）。双葉町遺跡出土資料でも、関東系土師器と明記されていないが、壺がある。

双葉町遺跡出土資料と比較し、以下の点が注目される。

①土師器（I類）壺は、当遺跡より、黒色処理を施さないBの出土割合が高い。

②当遺跡で確認できる縦方向のヘラケズリを伴う甕は長胴のみだが、双葉町遺跡では、長胴・球胴両方存在する。

③については、双葉町遺跡例が御駒堂遺跡、名生館官衙遺跡などの陸奥側の土器様相に類似すると言え、較べて本遺跡例は陸奥的な様相というより、在地の様相が強いイメージを受ける。

F 海獣葡萄鏡について

本調査により、山形県内で初めて、海獣葡萄鏡が出土した。日本海沿岸で最北の出土遺跡となった。それ以降、本県より北での海獣葡萄鏡の出土を確認していない。それまでは、子安遺跡（新潟県上越市）での発見が北限とされてきたが、それを北進する結果となった。東北地方では2例目で、市川橋遺跡（宮城県多賀城市）でも1面

出土（No14トレンチ）し、全国では30面近く見つかっている。

県内では、当遺跡から南東方向約4kmに位置する弥生～古墳時代にかけての集落跡である馬洗場B遺跡（山形市）から、古墳時代初頭の内行花文鏡（破鏡）が見つかっている。また、お花山古墳（山形市）1号墳から変形捩文鏡、22号墳から獸形鏡、下小松古墳群（川西町）薬師沢支群第143号墳から鋸齒文鏡が見つかっている。古代においては、5点目の鏡資料である。

本調査で出土した海獣葡萄鏡は、S T181住居跡から出土した。床面直上からの出土である。出土土器の年代は8世紀第2四半期と想定される。

鏡の形状は、約1/2の破片資料である。仿製鏡と考えられる。残存状態から円鏡の直径62mmの小型海獣葡萄鏡と推測できた。海獣葡萄鏡は、径が30cm以上の大型、20cm以上30cm未満の中型、そして、10cm以下の小型と大きさで分類されている。その小型品の中でも、径が60mm前後のサイズが最も多く発見されている。状態は全体的に腐食し、本来の鏡の表面は失われているが、内区、外区に配置された唐草文や獸などの存在は確認できる。

分析の結果、銅を主成分とし、鉛とアンチモンを比較的多く含むことがわかった。アンチモンは、わが国では7世紀後半から8世紀中頃という極めて限られた時期に認められる。他に背鏡の赤色部分から水銀が検出され、水銀朱が付着していると考えられた。

他の出土例でも、全体的に腐食または、鏡面の調整が不十分なものが多い。小型の海獣葡萄鏡は、水辺等で廃棄されることにより、祭具としての機能を全うしたと考えられている。ただ、本資料は河川出土ではなく、竪穴住居出土資料である。類例は少ないが、寺家遺跡（石川県羽咋市）で、8世紀第1四半期～8世紀第3四半期の竪穴住居跡（S B T24床面、S B T16覆土、S B21覆土）から小型海獣葡萄鏡が出土している。S B T16においては、廃絶時に鏡を埋土に埋め込む儀式の可能性が指摘されているが、本資料においては、出土地点がちょうど、搅乱部分にあたり、正確な堆積状況が見出せない。

G まとめ

発掘調査により、120棟以上にのぼる住居跡が見つかり、さらに遺物が整理箱にして約280箱出土した。

遺物のほとんどが土器で、古墳時代から奈良・平安時代にかけての資料であった。具体的には、古墳時代前期（4世紀）、7世紀後半から9世紀前半である。その中でも、8世紀中葉から8世紀後半にかけての資料が多く、逆に8世紀前葉の資料が希薄である。

土器内容は、山形盆地で使用される在地土器の他に、外来の土器も含まれていた。関東地方の特徴をもつ関東系土師器や、東北北部の特徴をもつ土器も使用されていた。関東系土師器は7世紀後半から、平野山窯跡が本格的に操業を開始する8世紀中葉までの間に確認できた。それ以降、関東系の特徴は在地土器に吸収され、新たな土器群として、須恵器と土師器（I類・II類）と同様、使用されていくことがわかった。

土器様相・年代から、川前2遺跡は、山形盆地が律令国家に組み込まれる頃の集落跡であったことが推測される。さらに当遺跡周辺に、関東系土師器出土の上敷免遺跡や、内行花文鏡出土の馬洗場B遺跡など、出土遺物との類似した遺跡が集中していることから中核的な存在であったことが推測される。また、双葉町遺跡と同様、関東地方からの移民集落としての性格を帶び、また、墨書き土器の存在等から勘案すれば、末端官衙としての役割も果たしていたとも考えられる。